

マイスター・エックハルトのドイツ語説教における「悪」の意味

Meaning of "Evil" in the German Sermon of Meister Eckhart

中 川 憲 次

はじめに

ここでは、マイスター・エックハルトがその晩年にケルンで為したとされる説教をテキストにして、スコラ学者でもあったエックハルトの「悪」をめぐる思索が、現実に「悪」に襲われ苦悩する人々との出会いの中で、ドイツ語説教においてどのように展開されたのかを辿りたい。

マイスター・エックハルトがドミニコ会神学大学学頭として過ごしたケルン時代に書いたとされるラテン語説教の第17番の草稿において、エックハルトは次のように言っている。「存在より落下することは死である」(1)。また同じくケルン時代に書かれた第28番の草稿の中では「存在からの落下が悪の原因であり、悪そのものである」(2)とも言っている。ここから、エックハルトの言う「悪」とはたとえば「死」であるということが分かる。そして、「悪」が「死」であるなら、「悪」とは人に襲いかかり、人を無に帰せしめるものである。晩年にこのような見解に達していたエックハルトが、「悪」をめぐる、ラテン語の分からない庶民に対して彼等にも分かる中世高地ドイツ語で説教した時、どのように語ったのであろうか。われわれは、いよいよエックハルト晩年の円熟したドイツ語説教を読み進みたい。

1 説教の選定

ここでは、Joachim Theisen の典礼の場に基づいて説教の為された日時を特定するという提案(3)に従って、1325年9月8日から1326年6月24日までのケルンで為された説教を取り上げたい。説教の為された日時と場所は以下の如し。

説教第12番	1325年9月8日もしくは12月8日	
	ベネディクト女子修道会マカベア修道院で	
説教第22番	1325年12月7日もしくは14日	
	大聖堂西方のシトー会女子修道院付近	
説教第13番	1325年12月28日	場所不明
説教第1番	1326年2月11日	場所不明
説教第51番	1326年2月26日	場所不明
説教第26番	1326年2月28日	場所不明
説教第25番	1326年3月4日	場所不明
説教第11番	1326年6月24日	場所不明

われわれはこれらの説教の重要な聴衆としてベギンを想定している。それについては、すでに1995年の本学会第46回大会において「マイスター・エックハルトの説教と女子修道会——ケルンのベギンが聴いたエックハルトの説教——」と題して発表させていただいた。そこでは、今回も取り上げた説教第12番の言葉に基づいてケルンのベギンがエックハルトの説教の重要な聴衆であったことを示しておいた。

世俗の直中で男性のギルドにも抗して働きつつ、宗教的な生活を為そうとしたベギンの生は、中世女性史研究家クラウディア・オピッツが『女の歴史 II』で言っているように「無謀な企て」(4)であった。その無謀さを裏付けるかのように、1311年から1312年にかけて開催されたヴィエンヌ公会議のクレメンス5世による教皇勅書は厳しくベギンを追及している。cum de quibusdam mulieribus と始まる第16条に曰く、

「誰に対しても服従を誓っておらず、財産を放棄しておらず、認可された修道会則に従っておらず、従って、どのようにしても修道女とは考えられないにもかかわらず、ベギンの衣と呼ばれる衣装をまとい、ひいきする特定の修道士と密着した関係にある俗にベギンと呼ばれる女がいる。(中略)。われわれは、神聖なる公会議の賛成により彼女らの地位を永久に禁止し、神の教会から根絶しなければならないと信じる」(5)

この勅書から13年ほど経っていたが、ベギンに対する迫害は激しくなっていた。このようなベギンとの関わりの中で、エックハルトは、1326年の夏には厳しい異端審問の矢面に立たされることになる。そして、1327年にはアヴィニョンの教皇庁へと異端審問に対する申し開きの旅に出て、途上、死ぬのである。よって、これらの説教は切羽詰った状況で為されたと言えよう。これもまた切羽詰っていたベギンを相手に、エックハルトは文字通り命がけで語りかけていたに違いない。

2 これらの説教のいくつかの特徴

(以下、説教の引用は為された年月日順に並べた)

ここでは、上に取り上げた説教の、本発表の本題以外のいくつかの特徴について述べてみたい。まず、次の言葉は、エックハルトの切羽詰った状況を示しているように思われる。

「昨晚、すべての譬は前段階でしかないと思った。(中略)。もし、あなたが実をえたいなら、殻は破らなければならない (die schal muz zerbrechen)。そして、同じくその本性をそのものとして見つけたいならば、譬のすべては砕いてしまわねばならない。」説教第51番(6)

エックハルトは、中世の説教者のご多分に漏れず、譬を多用した説教者である。それも、実に効果的に譬を用いた、譬の名手だったと言えよう。それだけに、この言葉は、迫害状況における霊的指導にもどかしささえ感じつつあるエックハルトの心が察せられる言葉である。

もう一つ紹介したいのは、次の言葉である。

「もし、教皇を私が殺したと仮定した場合 (wurde der babest mit miner hant erslagen)、それにもかかわらず、私の意志でしたのでないなら、私は聖壇に進み、ミサをとり行なうであろう。」(説教第25番)

ここでは、教皇の異端審問を受けつつある状況下、教皇に殺されるかもしれない男が「教皇を殺す」という言葉を譬で語っている。このような言葉が異端審問官の目にとまれば、もちろんただではすまなかったであろう。

最後に紹介したいのは、ベギンなる聴衆の存在を強く窺わせる次の言葉である。

「ここへ来る道すがら、愛から涙を流すかもしれないので、来ないほうがよい、と私は思った。あなたがたが愛から涙を流したかどうか、それは問わない。(Ich gedachte underwegen, do ich her solte gan, ich enwolte niht her gan, ich wuirde doch naz von minne. Swenne ir naz sit worden von minne, daz Iazen wir sin.)」説教第22番

エックハルトが、涙を流しつつ関わった聴衆とは、窮状を生きるベギン以外に考えられない。

3 エックハルトのドイツ語説教における「悪」

3. 1 人間の存在論的な「悪」を示す言葉

まず、説教第11番の言葉を引用したい。曰く、「すべての被造物は純粹に無 (ein luter niht) である」。さらに曰く「ある何かを求め、狙うものは、無を求め、狙うものである。ある何かを乞い願うものには無が与えられる」。このように、エックハルトは人間は存在論的に「無」であるという。そして、この「無」は、先に挙げたラテン語説教第28番が言っていたごとく「悪そのもの」である。

ここでもう一つ、語られた年月日が不明であるので先のケルンの説教リストには挙げなかったが、内容的には説教第26番に結び付くので、ケルンで語られた可能性が高いとされている説教第65番から引用したい。曰く。「さて、全被造物が示し得る全ての善を取り上げよ。それらの善は、神と較べれば純粹な悪 (luter boesheit) である」。こうして、人間は存在論的に悪を為す存在である。人間が他者に為す暴力や破壊や殺戮は全て、このような存在的に悪なる人間の「為す悪」である。

他方、エックハルトにとって、神は存在論的に善である。説教第13番に曰く、

「私たちの名前とは私たちが生まれるべきこと、父の名前とは生むことを意味し、そこでは神性が、私が聖マリア修道院で語ったように、全純粹性の充溢である始原の純粹から (uzer der ersten luterkeit, diu ein vullede ist aller luterkeit) 光を発散するのである」。さらに説教第26番に曰く、

「聖ピリポは『主よ、私たちに父をお示し下さい、そうすれば私たちは満足します』(ヨハネ14・8) というのである。これは、善性が起因する髓のような神を求め、善性が流れ出る核のような神を求め、善性が湧き出る根、水脈のような神を求めるのである。

このように、エックハルトにとって神は「神性」を有し、その神性は、「全純粹性の充溢である始原の純粹から光を発散する」のである。そして同時に、神は「善性が湧き出る根、水脈」である。

3. 2 被る悪(不幸等)をめぐる

人間が存在論的に悪を為す存在であるならば、そのような人間の為す悪を人間が被ることも必然である。そのような悪は不幸として人間を襲う。又、その他、病気等の不幸が人間を襲う。エックハルトはそのような不幸の原因について説教第26番において次のように言う。

「あなたが被造物のために祈ることは即ちあなた自身の損害のために頼んでいるわけである。なぜなら、被造物が被造物であるかぎり、被造物が自分のうちに苦しみ、損害、災い、不幸をもつからである (wan also balde so creature creature ist, so treget si inne bitterkeit und schaden und ubel und ungemach.)。それゆえ、人々が不幸や苦しみにあうのは、当然なわけである。なぜであろうか。彼らがそれを願ったからである」。

エックハルトは、人間が「被造物であるかぎり」、不幸は人間にとって必然的なものだと言うのである。さらに、説教第25番においても次のように言う。

「神はあなたが病気であることを望まれるが、あなたは健康でありたい、神はあなたの友が死ぬことを望まれるが、あなたは友が神のご意志に反して生きることを願う、とすれば、真に、神はあなたの神ではないだろう (Got wil, daz du siech sist, und woltest du gesunt sin, got wil, daz din vriunt sterbe, und woltest du, daz er lebete wider gotes willen: in der warheit, so enwaere got din got niht.)。(中略)。私たちは、昼夜、『主よ、み心がなりますように』(マタイ6・10) と叫んで、神の耳を聞こえなくしてしまっている。そして、神の意志がなるとき、私たちは怒るのである、それはまったく間違っている (Wir touben got naht und tac und sprechen: 'herre, din wille werde !' Und so danne gotes wille wirt, so zurnen wir, und dem ist gar unreht.)。』

エックハルトにとって、不幸は「神の意志」であり、人間が甘受すべきものであると言うのである。そして説

教第11番では、信仰者達の不幸を厭う様が批判される。曰く、

「ここではいく人かは処女であるが、あるものは、自分では処女と思っているが、処女ではない。真の処女は小羊がどこへ行こうが、喜びであれ、悲しみであれ、ついて行く。あるものは甘美で、楽しいときは小羊に従うが、苦悩や、災害や、辛苦にであうや、くると向きを変え、小羊に従わない (Sumliche volgent dem lambe, so ez gat in suezicheit und in gemach; so ez aber in liden und in ungemach und in arbeit gat, so kerent sie wider und envolgent im niht.)」

こうして、エックハルトにとって「苦悩や、災害や、辛苦」はこの世の常態であった。

では、そのような被る悪としての不幸等は、どのように克服され得るであろうか。エックハルトは説教第12番で次のように言う。

「父の永遠の知恵を聴こうとするものは、内に、我が家にいなければならない (Swer die ewige wisheit des vaters hoeren sol, der sol inne sin und sol da heime sin und sol ein sin, so mac er hoeren die ewige wisheit des vaters.)。 (中略)。神は私たちが『神の独り子として生まれた御子 (=以下「独り子」と訳す)』になるために、その行いの全てをなすのである (Got wurket alliu siniu werk dar umbe, daz wir <der eingeborne sun> sin.)。 (中略)。人が捨てることができる最高で最大のものは、神のために神を捨てることである。さて、聖パウロは神のために神を離れたのである。 (中略)。彼は神にいかなるものも与えない、また、神からいかなるものも受けない。それはひとつの一であり、純粋な合一 (ein luter einunge) である。ここにおいて人は真の人である、この人には、神の存在にいかなる苦難も襲うことができないように、苦難が降りかかることはない。 (中略)。もし、私がほんの一瞬でもこの存在のうちにあるならば、私は自身を糞の中の蛆虫 (mistwurmeln) と同じであるとはみなさないであろう。 (中略)。ところで、このように神の意志に基づく人は、神と神の意志以外のものは望まない。仮にこの人が病気になったとしても、健康であることを望まないであろう。彼にとり一切の苦しみは喜びであり、もし、彼が神の意志に真に基づいているならば、すべての多様性は彼にとりあらゆる状態 (blozheit) であり、単一性 (einicheit) である。それどころか、地獄の責め苦 (hellischiu pine) があっても、それは彼には喜びであり、至福であろう。彼は自分自身から自由で、脱却して、彼が受けなければならないどんなものからも自由であるに違いない。」

ここで、エックハルトは「内に、我が家がいなければならない」と言っている。エックハルトの言う「内」、「我が家」とは魂の謂である。この魂の「内」なる「我が家」において、「神の独り子」が生まれ、さらに、そこにおいて、神と人間との「純粋な合一 (ein luter einunge)」が起こり、そのようなことが起こった人間には「苦難が

降りかかることはない」のである。そのような人間にとっては、最早、「地獄の責め苦 (hellischiu pine) があっても、それは彼には喜びであり、至福であろう」ということになる。

また、説教第22番は今しがた引用した説教第12番と同じく、魂の直中における神の独り子の誕生を語るが、その説き方は次のようである。曰く、

「私たちは父が永遠に生んだ独り子である (wir sin ein einiger sun, den der vater ewicliche geborn hat.)。 (中略)。神がかつて人間のために行なった最大の善は、神が人になったことであった (Daz allermeiste guot, daz got dem menschen ie getete, daz was, daz er mensche wart.)。 (中略)。あなたがたが私に向かって、あなたは天の父が永遠に生んだ独り子であるなら、永遠に神のうちで子であったのかどうかと尋ねるならば、私はそうであるとも、そうでないとも答えるであろう。そうであるというのは、父が私を永遠に生んだことにより子であり、しかし、生まれなかったことによれば子ではない。 (中略)。地は下に向かって遠くに逃げるができないから、天は地に流れ込み、その力を地に押し込み、地が望むと否とに拘らず、地を豊かにするのである神から逃げようと思っている人はこのようなものであるが、神からは逃げることはできない。いたるところ神に知られている。神から逃げようと思っても、神の懐に飛び込んでしまう。神はあなたが好もうと好むまいと、眠っていようと覚めていようと、あなたのうちにその独り子を生み、御自身の務めを果たすのである (alle winkel sint im ein offenbarunge. Er woenet gotte entvlihen und Ioufet im in die schoy. Got gebirt sinen eingebornen sun in dir, ez si dir lieb oder leit, du slafest oder wachest, er tuot daz sine.)。」説教第22番

エックハルトによれば、最早、人間は神から逃げられず不幸になりたくてもなり得ないのである。そのあたりの消息について、説教第1番は次のように言う。

「喜びも、悲しみも、神がこの世に創造したすべてのものも、人〔の心〕をかき乱すことはできない。それどころか、その中にあっても、神の力の中にあるように力強く毅然としている (er emblige gewaltliche dar in stände als in einer gotlichen kraft.)。」

エックハルトによれば、人間は喜びや悲しみの直中で「神の力の中にあるように力強く毅然としている」ことができるのである。それどころか、説教第51番によれば、人間に襲いかかる不幸こそ、人間が神に出会う契機である。曰く、「そこで彼は神的な光を見た。実際には、人々は暗闇に光を見つけたのである。それで、人が苦悩や災難に遭うと、この光が私たちに最も近くなる」。

結局、不幸等の「被る悪」を人間が克服できるか否かは、ひとえに神と人との「純粋な合一 (ein luter einunge)」にかかっていた、と言えよう。このことを如実に示すのは、エックハルトの説教の末尾によく出てくる次のような言葉である。まず、説教第26番の末尾に曰く、

「私たちがこのように真に子になるために (wir alsus in der warheit sun werden,)、私が述べた真理が私たちをお助け下さいますように。アーメン」。

次に説教第25番の末尾に曰く、

「神がいつも与える第一のものは神御自身である。あなたが神をもつときは、一切のものを神とともにもつ。(中略)。意志が神の意志と一つになると、そこから唯一の一が生じ、天の父はその独り子を御自身の内に——私の内に生むのである。(中略)。私たちがこのように神と合一するように (wir alsus vereinet werden mit gote,)、今、述べた真理が私たちを助けてくださいますように、アーメン」。

そして、説教第11番の末尾に曰く、

「神の最高の意志は生むことである (Gottes hoehstiu meinunge ist geben)。神が神の子を私たちの内に生むまでは、神は決して満足しない。(中略)。私が純粋に神を求め努めるならば、私の上には神以外のものはいないし、そうなれば、いかなるものも辛いことはないし、そうすぐには悲しむこともない。(中略)。どうか神の恩恵が私たちのうちに生まれるように、一切のものが私たちのうちで完全になりますように、神よ、私たちを助けてください。アーメン」。

エックハルトはこれらの説教の末尾で、会衆に本当に伝えたかったことを語っていたのであり、特にアーメンの前の言葉は説教の終わりに為された祈りである。エックハルトの説教は、人間が神と合一する一点を目指して突進していたのであり、そこにのみ悪を克服する道が見出されたと言えよう。

ところで、エックハルトの死後、1329年3月27日に出されたヨハネス22世教皇勅書「主の耕地において (In agro dominico)」の第20条から第22条までは、次のようになっている。

第20条、よい人は神の独り子である。(Der gute Mensch ist der eingeborene Sohn Gottes.)

第21条、高貴な人は父が永遠の昔から生んだ神の独り子である。(Der edle Mensch ist jener eingeborene Sohn Gottes, den der Vater von Ewigkeit her gezeugt hat.)

第22条、父は私を彼の子として、そして、同じ子として生んだ。神が行なう何事も一である。それゆえ、父は私をいかなる差異もつけないで彼の子として生んだのである。(Der Vater zeugt mich als seinen Sohn und als denselben Sohn. Was immer Gott wirkt, das ist Eines; darum zeugt er mich als seinen Sohn ohne allen Unterschied.)

勅書はこれらの言葉には「たとえ多くの説明や補足がなされることで、カトリック的な意味が示され、また、あり得るとみとめられるとしても、まったく不穏当な響きがあり、大胆すぎ、異端の嫌疑があるものと認めた」としている。これらの条文を、例えば植田兼義氏は、20条が『神の慰めの書』から、21条が説教第14番から、22条が説教第6番から、それぞれ引用されているとする(7)

が、われわれが今回取り上げた説教からの引用としても何ら問題はないであろう。

この勅書の26条には「悪」の問題に関わる次のような文章がある。

第26条、全ての被造物は一つの純粋な無である。私が言いたいのは、それらの被造物が低い何ものかであるとか、ある何ものかであるとかいうことではなく、純粋な無であるということである (Alle Kreaturen sind ein reines Nichts: ich sage nicht, das sie etwas Geringes oder[uberhaupt] irgend etwas sind, sondern das sie ein reines Nichts sind)

ここにこそ、「悪」の問題が如実に出ている。ここでは現代ドイツ語訳を示したが、先にわれわれが引用した説教の言葉では、次のようになっていた。

「すべての被造物は純粋に無 (ein luter niht) である。」
説教第11番

ここで、これもまた先に引用した説教第65番を思い出していただきたい。エックハルトは次のように言っていた。「さて、全被造物が示し得る全ての善を取り上げよ。それらの善は、神と較べれば純粋な悪 (luter boesheit) である」。こうして、エックハルトにとって人間存在は「純粋な無」、「純粋な悪」であった。エックハルトを異端と断じた人々は、この「すべての被造物は純粋に無である」という言葉のどの点に「まったく不穏当な響きがあり、大胆すぎ、異端の嫌疑がある」と考えたのだろうか。それは、この言葉に教会体制側にとって一般信徒を管理しがたくさせるきっかけとなる響きがあったからではなかったか。

1215年のラテラノ公会議で一般信徒の年に一度の告解が義務付けられて以来、中世における罪の誇張の傾向は極まり、聴聞司祭による一般信徒の管理は強まっていた。一般信徒に善行を積むことを奨励するのが、中世後期の教会体制側の一般信徒管理の方法であった。ラテン語説教との関係で先に触れたように、エックハルトにとって人間存在は純粋な無であり、純粋な悪である。純粋な悪なる存在は、教会体制の命じる外的行為にいかにも励もうとも、人間の存在論的な悪も、人間が被る悪も克服することはできない。そのところを、エックハルトは一気に、「私達が独り子になる (説教第12番)」と語ったのである。

結び

エックハルトによれば、生まれつきの人間は「存在からの落下 (ラテン語説教第28番)」状態にあり、「純粋な無 (ドイツ語説教第11番)」であり続ける。しかし、それにもかかわらず人間は、「父が永遠に生んだ子であり、しかし、生まれなかった存在 (説教第22番)」でもあり、真の存在、すなわち「我が家 (説教第12番)」なる神から流れ出た存在である。

人間がそのような存在論的に悪なる存在であるのに対

して、神は「全純粋性の充溢である始原の純粋 (der ersten luterkeit, diu ein vullede ist aller luterkeit) (説教第13番)」であり、「善性が湧き出る根、水脈 (説教第26番)」である。

次に、人間が被る悪としての不幸等の根拠について、エックハルトは、人間が存在論的に悪なるが故に、「自分のうちに苦しみ、損害、災い、不幸をもつ (説教第26番)」と言っていた。また、神の意志の成就を自明のごとく祈っていながら、今、ここの現実を神の意志の成就と受け止められない人間の欺瞞を「神の意志がなるとき、私たちは怒る (説教第25番)」と、暴いていた。

では、そのような人間の存在論的な悪と、被る悪とを包含した総合的な悪を克服するにはどうすればよいのか。エックハルトは言っていた。「私たちが神と合一するように (説教第25番)」と。そして、まさに、その点が、ネガフィルムのように教皇勅書「主の耕地において」の異端断罪条文によって浮かび上がってもいた。特に次のような言葉が聴衆の「悪」の克服に決定的であり、かつ異端として断罪されるのにも決定的な言葉であった。

「神は私たちが独り子になるために、その行いの全てをなすのである (Got wurket alliu siniu werk dar umbe, daz wir der eingeborne sun sin.)」説教第12番

「私たちは父が永遠に生んだ独り子である (wir sin einiger sun, den der vater ewicliche geborn hat.)」説教第22番

実は、シュトラスブルク時代に物されたといわれる『神の慰めの書』には、苦難の直中にある者に対する有効な慰めとして *mitliden* (神が共に苦しんでくださる) という言葉をエックハルトは用いている。ところが、切羽詰った状況下に語られたケルンにおける説教では *mitliden* という言葉は影を潜めている。ここに至って、神は共に苦しんでくださる存在ではすまなくなっている。最早、「私たちが真に子 (イエス・キリスト) になる」(説教第26番) 必要があったのである。これが、エックハルトにおける *unio mystica* であった。それは、苦難の極みで、状況が呼び込んだ神秘思想であった。これこそ、緊迫した迫害下を生きるベギンにとって力となる言葉であったろう。ベギンは神の独り子となって、被る悪を克服しつつ、生き活きと生き得たであろう。それこそ、教皇庁を頂点とする当時の教会体制にとって最も許すことのできない事柄であったろう。その証拠が、教皇勅書「主の耕地において」の20条から22条までに如実に示されていたと言えよう。

エックハルトにとって、「悪」は単なる哲学的考察の対象ではなく、克服すべき課題であった。そのために、イエス・キリストの存在が決定的であったのは言うまでもない。しかし、エックハルトの言うところは、単に伝統的な贖罪論に留まっていなかった。イエス・キリストの十字架の血潮によって救われるという教義に触れず、エックハルトは聴衆が「イエス・キリストになる」と説

くのである。1325年から1326年のケルンで使徒的生活を目指し、「無謀」な生き方を選んだベギンなる聴衆を前に、その聴衆の実存に思いを致してエックハルトが説教するとき、そのように語るほかなかったのであろう。ケルンにおけるドイツ語説教のエックハルトにとって「悪」とは、イエス・キリストとの合一によってのみ克服される類の事柄であったとまとめられよう。

今回のテーマとは結びつかないので取り上げなかった説教に、説教第18番がある。Theisenはこの説教を1326年3月26日に語られたものとしている。この説教の中に次のような言葉がある。「言葉にも大きな力がある。言葉で奇跡を起こすことができる (Wort hant ouch groze kraft; man mochte wunder tuon mit Worten.)」。ここに、説教という言語活動の力に対するエックハルトの確信を見ることができる。その言葉の通り、エックハルトが、例えば「私達が独り子となる」とベギン達を前に語ったとき、奇跡が起こったのである。その言葉によって、まさに「独り子」となった人間がいなければ、そのような言葉が当時の教会当局にとって不都合な言葉として断罪されることはなかったであろう。

(本稿は2002年9月21日から23日にかけて湘南国際村センターで開催された「キリスト教史学会第53回大会」において「エックハルトのドイツ語説教における『悪』の意味」と題して口頭発表した原稿に加筆したものである。)

註

- 1 原典は Meister Eckhart, lateinische Werke. Band IV, W. Kohlhammer Verlag, 1986を用い、訳は次の書物の199頁より。マイスター・エックハルト著／中山善樹訳註『エックハルト ラテン語説教集 研究と翻訳』創文社、1999年。
- 2 訳は上掲書の291頁より。
- 3 Joachim Theisen, Predigt und Gottesdienst: liturgische Strukturen in den Predigten Meister Eckharts, Frankfurt am Main; New York: P. Lang, 1990, 121頁。
- 4 クリスティアーナ・クラビシュ＝G・デュビイ、M・ペロー監修『女の歴史Ⅱ 中世2』、藤原書店、1994、514頁。
- 5 上條敏子著『ベギン運動の展開とベギンホフの形成—單身女性の西欧中世』、刀水書房、2001、41—42頁。
- 6 以下の説教の原典は Meister Eckhart, Deutsche Werke. Band I—II., W. Kohlhammer Verlag, 1986を用い、訳は次の書物を参照した。マイスター・エックハルト著 植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集 第6巻 エックハルト1』教文館、1989年。
- 7 マイスター・エックハルト著 植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集 第6巻 エックハルト1』教文館、1989年、417—418頁。